

大学図書館への思い

図書館長 堀 信行



私は、平成21年4月から白石太一郎前館長の後任として図書館長に就任したばかりであるが、日ごろから抱いている大学図書館への思いを綴ってみたい。大学に身を置くものにとって図書館への思いは格別なものがある。図書館は森羅万象について先人たちが人生をかけて思いめぐらした思索の結晶物で充填された場所である。そして、こうした文化遺産の空気を深呼吸できる幸せに包まれる場所である。そんな場所に館長という立場で身を置ける幸せ感が私にはある。現実の館長としての業務は、収納スペースの確保の問題や利用者へのサービスに関する諸問題など、むしろ図書館の快適空間を確保するための仕事に追われるものの、図書館への憧憬感は消えない。

私の前任大学の図書館の入口には、ラテン語で“Veritas vos liberabit”（真実はあなた方を自由に）と書いてあった。図書館に所蔵されているものが真実を伝えるものであるならば、図書館に集う人々は真実の探求者であろう。真実を知ることによって、本質を見失わず自由な思考の世界を獲得し、新たな世界を切り開いていけるのだと思う。

図書館に収まる知的財産は、「真実とは何か」とか「何が真実か」をめぐる人間の考究の歴史の遺産である。それは単なる過去の遺物ではない。知的財産のどれを紐解いても生き物のように息づいているのだ。図書館に収納された知的財産に新たな生気を与え、活かすのはわれわれ次第なのだ。常なる日々、それらは図書館の中でそっと息を潜めて、静かにわれわれとの出会いを待っている、静寂の中であって、図書館は知的な緊張感の漂う場所なのだ。

図書館に立ち入るといつもよみがえる私なりの感覚がある。アフリカのカメルーン南部の熱帯雨林の成立過程とそれを支えた地表面の風化層と堆積物の関係を調べるために昼間も薄暗い熱帯雨林に分け入

った時にゾクッとする感覚がある。果てしない奥行きまで充満する生命感、一本一本の木々の呼吸が感じられる静寂、膨大な白アリや昆虫が動き回り食餌するかすかな音から知る生命的な緊張感は忘れられない。あるいはアメリカのカリフォルニア州の中北部に分布する、先住民の聖木であり世界一の高木として有名なレッドウッドの森の成立史を解明するために初めて分け入った時、林立する巨木レッドウッドの深い森に、震撼するような畏怖の念に襲われたあの感覚が忘れられない。図書館に入ると私にはあの深遠な森の中に立ち入ったような感覚と畏敬の念が蘇る。大学は、建物という森の空間の中に、もう一つ図書館という「知の森」をもっており、それが大学の心臓部にあたる空間でもあるのだ。

しかしながら本学の図書館の位置は、大学の敷地の縁辺にある。私の認識では、大学の図書館というのは大学構内の中央部、すなわち学内における動線を描いた場合に、動線が収斂し、同時に発散する位置関係にあるのが望ましいと思っている。この点で本学の図書館の位置は、いささか惜しまれる。しかし、それを補うくらいに、大学構成員の精神的な支柱の一本であり、誇りをもって図書館を大切にしている心情でつまれるような存在であってほしいと強く願っている。

ところで私たちは、図書館を当然のように「としょかん」と読む。しかし、明治の頃は「ずしょかん」と呼んでいたという。図書館は、文字通り「図」と「書」の館であったのだ。したがって図書館は、本来地図のような図録類も所蔵すべきものである。現に本学の図書館には、古地図をはじめ各種の図録類が蒐集されている。とくに本学が充実を図っているのは、奈良に関する「図・書」類の蒐集である。淡々とした日々の積み重ねが、図書館の充実につながっていくことは間違いない。図書館の日々の営みは、きわめて地味であるが、常に高い目標を抱いて取り組むことで、質の高い図書館が維持され、奈良大学の誇りの一つになるに違いない。

企画展示「香港の新聞『大公報』とその周辺」を担当して

社会学部准教授 芹澤 知 広



奈良大学図書館の企画展示「香港の新聞『大公報』とその周辺」(2009年10月10日～2010年1月30日、奈良大学図書館展示室)が行われた経緯と展示資料収集に関わる情報を、この機会に記しておきたい。

1. 香港の新聞『大公報』について

本企画展示の主要な展示資料である『大公報』の原紙(新聞紙)は、平成16年度～18年度、科学研究費補助金・基盤研究(B)「香港におけるリテラシーの変遷と変異に関する社会言語学的研究」の研究代表者であった東京大学大学院総合文化研究科・吉川雅之准教授が、香港での調査中に新聞社・大公報から直接提供を受けて収集したものである。私は、この共同研究の研究分担者であり、吉川先生のご協力を得て、この『大公報』から抽出したデータにもとづいた研究をしていた。そのことがきっかけとなり、共同研究の終了後、奈良大学図書館が『大公報』を受け入れることになった。

私の記憶に基づくと、共同研究が行われていた当時、駒場の新築の建物のなかにある吉川先生の個人研究室は、『大公報』の入った大きな段ボール箱かなりのスペースが占拠されていた。研究室は南側を向いていたので、吉川先生は厚いカーテンを用意して、『大公報』が傷まないように注意を払っていた。

東京大学から奈良大学へ運ばれる際にも、香港から船便で送られるのに使われたのと同じ段ボール箱が使われた。「吉川助教授共11箱」と箱に貼られている中国語の文字から察すると、香港から東京へ運ぶ時には11箱に詰められたようだが、奈良大学が受け入れているのは10箱である。それぞれの箱のなかには、2年分の『大公報』が入っており、それは月ごとに綴じられている。おそらく本来は、社内での閲覧用として整理され、保管されていたものと思われる。

吉川先生も心配されているが、この『大公報』は、綴じるために開けられた穴の付近が破損しやすく、また1970年代以前のものには紙の劣化が著しい。こ

のまま箱の状態で保管されるのではなく、必要な部分には修復作業が施され、近い将来にはしかるべきかたちで保管されることが切に望まれる。

近年、過去の新聞は、マイクロフィルムや電子情報のかたちで図書館に収蔵されることが多い。しかし、本企画展示において『大公報』が示す存在感からも明らかなように、過去の新聞紙自体のもつ物質文化としての側面は重要であり、奈良大学図書館が『大公報』を原紙のかたちで収蔵していることの意義は、将来さらに大きくなることが予想される。

2. 大公報の社屋について

かつての大公報の社屋は、香港島のワンチャイ(湾仔)の、路面電車が通る道沿いにあった。私は、1993年から95年にかけての香港留学中、10ヶ月間ノースポイント(北角)に住んでいたため、香港中文大学や香港大学からの帰宅途中、ほとんど毎日のようにバスの車窓から大公報の社屋と、「大公報」の題字をあしらった看板を目にしていた。

今回企画展示の準備にあたり、2009年8月香港を訪れる時に、大公報の社屋をたずねることにして、



写真1：路面電車の線路の両脇に屋台が並ぶノースポイントの風景(2009年8月、芹澤撮影)

住所を調べたところ、新しい社屋がノースポイントにあることがわかった。

路面電車のノースポイントの終点で降り、住所と地図とを見比べながら歩いて探したが、私は少々感傷的な思いも抱いた。このあたりの風景だが、私が住んでいたころは、本企画展示で展示した1968年の写真が伝えているものとそれほど変わりがなかった。しかし、今回あらためて路面電車の2階から景色を眺めてみると、ノースポイントに新しいビルが増え、路上も小ぎれいになったような印象をもった（写真1参照）。

留学中、私が間借りをしていたのは、ノースポイント・エステート（北角邨）という1950年代に建てられた初期の公団住宅である。その建物は、2003年に取り壊されて、今は更地になっている。そのなかに痕跡のように残った道があり、それを使って抜けて、フェリー乗り場から海岸沿いに東へ向かった。そこには新しく建てられたビルがいくつかあり、そのなかのひとつに大公報の事務所の入ったビルがあった。

事前にアポイントメントを取ることもなく、突然PRの部門をたずねたのだが、幸いにも親切な対応を受けて、1つの資料を譲ってもらった。それが本企画展示で展示した『大公報創刊九十五周年在香港復刊四十九周年紀念冊』（1997年）である。じつは、「大公報一百周年報慶叢書」というシリーズが、2002年に復旦大学から出版されていて、これを展示用に1セット入手できればと私は考えていたのだが、売り切れと言われて買うことができず、今回は展示できなかった。

3. その他の新聞資料について

2009年8月、香港へ渡航する前に、日本の知人から『明報周刊』（香港の新聞『明報』の系列の週刊誌）で編集の仕事をしている人物を紹介してもらった。香港に着いてから、この人に企画展示への協力をお願いした。明報の社屋は、ノースポイントから、さらに東、地下鉄の終点のチャイワン（柴湾）というところにある。その事務所で、多くの古い写真を見せてもらい、撮影年と場所が特定できる写真を選んだ。そして、そのデータを電子ファイルのかたちでもらって帰った。こうして、1960年代から70年代にかけての時代の香港の写真を展示することが可能になった。

このほか、『明報周刊』に関する資料も展示用に提供されたのだが、9月末に展示室で実際に新聞の資料を並べていくうち、展示スペースが足りないこと

がわかり、週刊誌や月刊誌（奈良大学図書館は『明報月刊』を所蔵している）に関する展示を今回は行わないことにした。

『大公報』以外に展示した古い新聞資料（『星島晚報』、『新晚報』、『香港同胞慶祝中華人民共和國成立二十二周年大會籌備委員會會訊』）は、全て、同じくチャイワンにある「神州図書有限公司」という古書店から、2009年8月に購入したものである。この古書店は、かつてセントラル（中環）にあった。私が留学していたころは、お土産ものとして需要のあった中国政府の宣伝ポスターなどの比較的新しい骨董品を古書以外に置いているほか、「内部文書」として関係者以外には流通しなかった「文史資料」などの中国国内の地方史の出版物を複製して売っており、日本人研究者にはよく知られていた。当時、香港島や九龍の便利なところに、このような古書店や学術書を扱う専門書店（多くは古いビルの2階にあるので、「二楼書店」とも総称される）がいくつもあったが、テナント料が値上がりしたためか、近年は数を減らしている。「神州図書有限公司」は、チャイワンという不便な場所の、しかも工場ビルの一室に今はあるが、おそらくテナント料にかかるコストを下げる発想から移転したものと思われる。

また、新しい新聞資料は、私が奈良大学の在外研修として、2002年から2003年にかけて香港大学に1年間滞在した時に住んでいた、九龍地区の外延部にあるクァイフォン（葵芳）で収集した。日本や外国の民族学博物館のなかで、現地の店舗を、売られ



写真2：クァイフォン地下鉄駅近くのコンビニの店頭で並べられた新聞（2009年8月、芹澤撮影）

ている品物まで、そっくりそのまま再現するという展示を私は見てきたので、香港の新聞売りの屋台を、そっくりそのまま再現するというアイデアを、かなり以前から持っていた。香港では新聞の宅配がないので、毎日家を出て新聞を買いに行かなければならない。そのため留学時代から、私の香港での日常生活にとって、もっとも身近な屋台は、新聞の屋台だった。

今回の展示のための店舗の選択で、この私のこだわりが影響した事情を説明しておくべきだろう。クアイフオンの地下鉄駅に近いこのあたりには、今や多くのコンビニエンス・ストア（「便利店」）があり、人々は屋台のほかに、コンビニでも新聞を買っている。コンビニの店頭には、新聞各紙を並べた棚が置

かれている（写真2参照）。人々は屋台で紙名を言って新聞を取ってもらい、代金の小銭を渡すかわりに、コンビニの店先で新聞を取り、店内のレジへ持って行き、オクトパス・カード（「八达通」、バスや地下鉄など香港の公共交通機関のICカード乗車券だが、コンビニでの取引の決済にも使える）を所定の位置にかざして代金を引き落とす。

私が屋台を選んだのは、人類学者がもつ伝統文化へのノスタルジアの反映かもしれない。今回は、屋台をまるごと再現するには至らなかったが、現物の屋台で並べられているのと同じかたちに新聞を並べて展示することで、私の人類学者としての長年の欲求が、幾分かは満足させられることになった。

図書館統計（2009年3月末現在）

	平成19年度 (2007)	平成20年度 (2008)
開館日数	278	274
入館者総数	150,557	146,151
図書所蔵数	377,260	392,561
和書	339,467	354,334
外国書	37,793	38,227
雑誌所蔵タイトル数	5,667	5,685
相互協力利用（依頼数）	463	776
相互協力利用（受付数）	1,131	1,168

☆開館日について

通信教育部生対象の特別開館日の変更により、日数・入館者総数とも僅かに減少しています。

☆図書所蔵数について

年々増加しており、知の蓄積物の入れもの＝図書館として、今後の在り方を検討して行きます。

☆相互利用依頼・受付について

近年の機関リポジトリをはじめ、情報のデジタル化により、受付・依頼とも多様化しており、利用者のニーズに応えるため、柔軟な対応をしています。



後記

奈良大学図書館報第8号をお届けいたします。原稿をご執筆頂きました堀館長、芹澤先生には心よりお礼申し上げます。来年度はハクルート叢書についての企画展示を予定しております。お楽しみに（編集担当）。

発行：平成21年12月22日

編集：奈良大学図書館 奈良市山陵町1500